

(講演録) 平安の『源氏物語』と江戸の『源氏物語』

——源氏菓子を起点に——

吉 海 直 人

史の資料があつて、手のつけようがないほどだからです。

今日は、同志社女子大学の吉海です。同僚の廣瀬千沙子先生に頼まれてどうか、源氏ゆかりのお菓子に目が眩んで、ここでお話をするはめになってしまいました。そのために、この二ヶ月ほど精神的に大変苦労しました。源氏を研究する私にとって、ただ源氏のお話をするだけなら、そんな苦労はありません。今回の私の悩みの種は、時代が近世であることと、対象が京菓子であることの二つです。

正直な話、源氏の研究者にとって近世は鬼門のようなもので、できれば素通りしたいと願っていました。というのも、近世に大衆化が進んだことで源氏文化も多様化しており、膨大な享受

また「江戸」の源氏文化は怪しいというか、平安時代の『源氏物語』を見ていると思つてみると、それは実は江戸時代の見方であつて、江戸時代のフィルターを掛けて源氏を見ていることがよくあります。それが江戸独自のものであることに気付かず、平安時代の生の源氏を見ているように勘違いしていることも少なくありません。ですから私は江戸に対して構えているというか警戒しているのです。

ここで会場になつている閑院宮を例にしてお話します。かつて江戸時代に世襲親王家として、四つの親王家が制定されました。それは徳川幕府における御三家に似たものです。現在はすべて断絶していますが、かろうじて建物だけが残っています。

この閑院宮邸にしても、今出川通りにある冷泉家にしても、確かに宮家の邸宅であり貴族の邸宅なのですが、それは江戸時代の建築物であり、到底平安時代のいわゆる寝殿造りには廻れません。特に閑院宮邸は天明の大火で全焼し、その後には再建されたものです。仮にこの閑院宮邸から『源氏物語』の生活を想像したとすると、それこそ江戸の『源氏物語』幻想になっしまいましたかねえせん。そのことをきちんと押さえないで、閑院宮だから貴族文化だといわれると困るといのが私の主張です。

また御苑の一角にある御所もその好例です。現存している御所は安政年間、つまり幕末に建てられたものです。その際、江戸の文化というか考証趣味で、なるべく平安時代に近いものかと考えられました。その点はいいいのですが、ご承知のように平安の御所には本来の内裏と里内裏の二種類があります。

まず位置が違います。平安時代は朱雀大路の北側にあったのですが、現在はずっと東に二キロもずれています。現在の場所は鎌倉時代に里内裏があったところであり、本式の内裏の場所ではありません。というより鎌倉時代以降、皇室の経済状態が悪化して、もはや正式な内裏を再建する力もなくなっていたのです。それもあって肝心の後宮があまりにも貧弱で、今の御所

には桐壺も弘徽殿もありません。今の御所から『源氏物語』を想像すると、それこそ江戸の色メガネで平安を見ることになり、また江戸の源氏は平安幻想であり、また江戸幻想でもあって、その辺りのことが曖昧になっているのではないでしょうか。本日はそれを仮に「もう一つの『源氏物語』」と名付けておきます。

次に今日の本題である「源氏と京菓子」というテーマですが、近世の研究者ならこだわりなく話せるのかもしれませんが、しかし私の場合、このテーマは源氏研究ではまずありえないものなので、拒否反応を起こしてしまいます。どうしてそうなのかを考えると、近世も私も、同じく『源氏物語』を対象にしているようでありながら、どうやらその『源氏物語』が同じものではないのです。どういうことかという点、われわれは源氏の本文を重視していますが、近世の大衆化された源氏はほとんど本文から遠ざかっています。

要するに作品をいかに読むかよりも、源氏の商品価値に目を付け、できるだけ自分たちの方に源氏を惹きつけることで、都合のいいように読み取っているのです。その一例として、源氏があまりにも大部なものなので、手っ取り早い方法としてダイ

ジェスト化が進みます。源氏の百分の一以下の分量でかまいません。もつとすごいのは百分の一以下、というより巻名と和歌一首だけの源氏文化も確立しています。源氏を読んで楽しむというより、源氏に触れるあるいは源氏を所有する文化といえます。それはいいかえれば源氏のパロディなのです。

もちろんそういった近世の源氏文化は、現在まで受け継がれています。たとえば源氏が映画化されていますが、監督は一度も源氏をともに読んだことがありません。千年紀の折、千住明さんが交響曲「源氏物語」を作曲していますが、源氏のイメージは「あさきゆめみし」を読んで思い浮かべたと発言していました。それなら交響曲「あさきゆめみし」がふさわしいと思います。そののですが、違和感を唱える人は他に誰もいませんでした。源氏能も源氏歌舞伎も、「もう一つの源氏」というか、加工されたものなのですが、一般の人はそれを源氏として受け止めています。それで何も思わないところが「もう一つの源氏」文化です。京菓子もそれにあてはまります。だから私は葛藤しているのです。

二

話を京菓子里に戻します。弘道館では毎年京菓子のデザイン展を開催していらつしやるようですね。昨年は百人一首の創作菓子だったので、私も学生や院生を連れて見学にうかがいました。恐らく百人一首の場合は和歌であり、古文のままなので、和歌の中で使われている言葉や表現をヒントにすれば、デザインをイメージしやすいし、それほど大きくはずれることはありません。しかし源氏はそうはいきません。源氏のデザインという条件で応募した人の、一体どれくらいの人が実際に源氏を読んで理解しているのか、ひよつとすると「あさきゆめみし」の知識ではないのか、などと私は心配しています。

もちろん京菓子ということで、百人一首や源氏のイメージをデザイン化して、それを手のひらに載せて食べるというのは、なんだか百人一首や源氏を自分のものにした気になるというか、身近なものになった気になります。それが一番の効果でしょう。そうやって古典をイメージして、和菓子を創作していただくのは、研究者にとってもありがたいことではあります。

ただし京菓子の主流は砂糖が自由に使えるようになる江戸時

代以降であって、菓子そのものは到底平安時代へは遡れません。というより「菓子」という言葉の意味さえ大きく違ってしまいました。そのことはご存じかと思いますが、「菓子」といったら古典では果物か木の実のことを指していました。橘や栗・梨・柿などが菓子なのです。

ですから「源氏物語」と京菓子」などというテーマでお話することは、『源氏物語』の研究者にはできないのです。『源氏物語』と京菓子というテーマは、平安文学研究者泣かせたということをおわかりいただきたいのです。という以上に、そもそも源氏は食べ物に関して全般に淡白で、描写が少ないのです。よく考えると、貴族は自分で料理しませんから、当然かもしれません。

それは『源氏物語』に限らず、他の『枕草子』などでも同様です。平安時代の貴族社会にどのような菓子が存し、貴族達に食されていたかということは、所詮無理な話なのです。江戸時代以降に確立された京菓みに類するものは、原則平安時代には存在しないというのが私の正直な答えです。

御菓子とセットになっているお茶にしても同じことがいえます。確かにお茶は平安時代初期に中国から日本にもたらされま

した。嵯峨天皇の時代に既に中国からお茶は伝来しているし、嵯峨天皇と弘法大師がお茶を喫して作った漢詩が残っています。でも、何しろ貴重な輸入品だったので、貴族の中でも一般化されるには至っていませんでした。むしろ仏教とのかかわりの方が強いようです。お茶の淹れ方にしても、現在の茶道のやり方とは違ってきます。

ついでにいうと、『源氏物語』にはお茶という言葉は一度も出てきません。光源氏は生涯お茶を飲んだことはないし、いわゆるお菓子を口にしたこともないのです。それにもかかわらず近世の幻想というか、京菓子の歴史を平安時代まで遡らせたいという願望で、つい無理をしてルーツを平安に持っていく努力が行なわれています。

その好例があります。嵯峨野にある二尊院には、平成になってから「小倉餡発祥の地」という石碑が建てられました。弘法大師が中国から小豆を持ち帰ったという起源説です。ただ小倉餡という名称はかなり後発です。餡にしても古くは肉餡(中国式)だし、後に塩餡になり、それが甘い餡になったのは、やはり江戸時代ではないでしょうか。

三

ここで平安時代の菓子について、もう少し詳しく述べさせてもらいます。もちろん『源氏物語』の中に、和菓子の起源のようなものがないわけではありませんが、決して積極的に描かれているわけでもありません。菓子のルーツとしては餅と饅頭があげられます。しかし源氏に唐菓子（饅頭）は描かれていません。餅にしても、たまたま少し描かれているというだけのことです。『源氏物語』は決して和菓子を好意的にあるいは積極的に描いているわけではないのです。紫式部も清少納言もスイトツ女子ではなかったのです。要するに『源氏物語』は菓子の資料としては必ずしも有効ではありません。

それでは身も蓋もないので、とりあえずいくつか菓子の起源のようなものが指摘されているところを紹介しておきます。

「餅」としては『源氏物語』葵巻における紫の上の新枕のところ、

その夜さり、亥の子餅参らせたり。（新編全集72頁）

と出ています。「亥の子餅」は旧暦十月のことを「亥の月」と称していたことによります（冬至を含む月が子の月でした）。

その十月の初亥に食べるのが亥の子餅です。これを食べると子孫が繁栄するといわれています。たまたまその日が十月の初亥だったので、「亥の子餅」が出されたのでしょうか。

そこから源氏は「三日夜餅」へと連想を転換し、

この餅、かう数々にとこそせきさまにはあらで、明日の暮に参らせよ。今日はいまいましき日なりけり。（72頁）

と、惟光に「三日夜餅」を用意させています。これはお菓子屋で作るのではなく、家庭で作っていました。もちろん当時お菓子屋はありません。「三日夜餅」という名称は、物語では避けられています。察しのいい惟光はすぐにピンときています。正式な結婚ではありませんが、せめて「三日夜餅」を用意させたところが源氏のはからい、紫の上に対する愛情のあらわれというわけです。もちろん源氏は、桐壺巻で葵の上と正式に結婚していますから、本来ならそこに描かれていてしかるべきですが、桐壺巻にそうといった描写は一切出ていません。

なお「三日夜餅」に関しては『落窪物語』にも少し詳しく、草餅二種、例の餅二種、小さやかにをかしうして、さまざまなり。（58頁）

「餅にこそあめれ。食ふやうありとか。いかがする」との

たまへば、〈中略〉「切らで、三つとこそは」と申せば、

(66頁)

と食べ方まで描かれています。おそらく葵巻はこれを踏まえているのでしょうか。

次に若菜上巻の蹴鞠の場面では、

わざとなく、椿餅、梨、柑子やうの物ども、さまざまに、箱の蓋どもにとりませつつあるを、

(142頁)

と、くだものと並んで「椿餅」が供されています。これはもち米の粉に甘葛を加えて作った餅を、椿の葉で挟んだものとされていますが、本当のところはよくわかりません。『源氏物語』にはこの一例だけですが、他に『うつほ物語』国議上巻にも、

大殿の御方より、檜破子、御酒、椿餅など奉りたまへり。

左の大殿よりは、梨、柑子、橘、菖葺などあり。(93頁)

と出ているので、当時普通に食されていたことがわかります(描写は類型的)。同時に梨・柑子という本当の菓子(くだもの)も供されていますが、これが早春だとすると、梨の実は季節と適合していないこととなります。

その他、宇治十帖の宿木巻には、粉熟(ふずく)という餅が供されています。中の君の出産と、それに伴う赤ん坊の産養と

して、薫(後見人)から盛大な贈り物が届けられますが、その中に、

高坏どもにて、粉熟まゐらせたまへり。(473頁)

がありました。

もう一例、女二の宮と薫が結婚した後の藤花の宴で、

宮の御方より、粉熟まゐらせたまへり。(482頁)

とあり、女二の宮側から粉熟が振舞われています。珍しく宿木巻に「粉熟」二例が集中しているわけですが、ともに高価な餅として描かれているようです。

以上が『源氏物語』に描かれた、いわゆる菓子に類するものすべてです。『源氏物語』には中国から伝来した、いわゆる唐菓子(奈良には油で餅を揚げたぶと饅頭があります)は描かれておらず、餅の類ばかりでした。しかもたったこれだけなのです。

ここから言えることは、一つには用例が非常に少ないこと、また現在のお菓子とはかなり違っていることです。しかも出された餅に対して、誰もおいしいとくまらずとか、という感想を口にしません。そういったものとは無縁だったのです。

なお餅についてですが、現在は京菓子屋と餅屋は袂を別つて

いますし、餅屋のことを下に見ているような側面（自負）もあるようです。以前、末富さんに二葉の豆餅の話を向けたら、京菓子は塩を使わないとあっさり切り捨てられてしまいました。それにもかかわらず、ルーツとしてだけ餅を許容するというのでは、やはり筋が通らないと思います。そのあたりのことをきちんと整理してほしいですね。

いずれにしてもここで押さえておきたいのは、『源氏物語』と菓子にはほとんど接点がないということです。私は何も『源氏物語』と京菓子の関係を否定したいわけではありません。そこに江戸時代の『源氏物語』幻想があるというのが本日のポイントです。もちろんルーツではなく江戸文化として、江戸時代の方が、『源氏物語』を解釈あるいはイメージして和菓子を製作することに問題はありません。ただしお話ししたように、『源氏物語』の享受にいささか奇妙なからくりがあることも事実なのです。

四

これまで平安の研究者と近世の研究者が議論するということはありません。これはいい機会かと思えます。近世の

研究者に喧嘩を売るつもりはないのですが、私の立場を表明させてもらおうと、たとえば江戸以降にも源氏の資料、写本・版本類はたくさんあります。しかし源氏に関しては、何しろ室町以前のものがたくさん残っているのです、何もわざわざ新しい江戸の写本で研究する必要はないということで、源氏の研究者は江戸をずっと無視してきました。もちろん契沖や宣長などの注釈は参照していますが、それでも江戸から平安を見る危険性は承知しておく必要があります。

膨大な広がりを見せる享受史に関しても、それは源氏の研究者がやるべきことではないとされてきたのです。江戸の享受史が、源氏研究の主流とされたことはありません。そのために源氏の研究者から、江戸時代は長く放置されてきました。源氏の研究者が、これまで近世に冷たかったことを私からお詫びします。ただ、これから先も急に江戸が見直されるとは思えません。

例えばかつてアメリカ合衆国議会図書館に、絵入源氏の版本が六十冊揃いで所蔵されていることが、朝日新聞で報道されました。それに関して国文学者の小西甚一さんだったか、日本には揃いがないとコメントされたのですが、これは明らかに誤りでした。日本に揃いがないのではなく、誰も絵入版本に関心を

示していなかったもので、どこに所蔵されているかがわからなかっただけなのです。調べてみるとたくさん残っていることがわかりました。同志社女子大学にも一セットあります(私が買ってしまいました)。そんな具合で、源氏の研究者は近世を見る必要がなかった、あえて見なかった(スルーしていた)のです。

もう一つ、大衆化の中の『源氏物語』ということ言えば、却って源氏離れというか、源氏の本文読解から遠い所にある、「もう一つの源氏」とでもいうべきものが幅を利かせています。平和な江戸時代になって、文学や文化が爛熟し、また版本などの出版が拡大することになり、比較的容易に古典文学に接することができるようになったことで、急速に大衆化が進んでいきます。

源氏をモチーフにした謡曲や歌舞伎などがその典型で、そこに身に付けた源氏の教養には、実際の源氏とずれが生じているにもかかわらず、それに気づかないというか気にしない源氏文化があるのです。多くの江戸源氏は、むしろこちら側かもしれない。これは近世におけるパロディ源氏ともいえる現象です。大部な源氏の研究では、その両方を同時に研究することができ

ないので、どうしても享受史の方がおろそかにされてきました。私の専門に近い「源氏かるた」など五十四組セットであり、なんと百人一首よりも枚数が少ないのです(半分)。これこそ五十四帖をかるたにしたもので、実のところ「源氏かるた」ではなく「源氏巻名かるた」というのが正しいと思います。ここにも幻想というか勘違いが生じています。いくら「源氏巻名かるた」で遊んでも、巻名くらいは覚えられるかもしれませんが、内容もあらずしも覚えられません。極端なダイジェスト化がもたらしたのは、作品を深く読む・本文を解釈することではなく、作品に触れること、作品を所有した気になる(身につける)ことでした。それで庶民には十分教養として成立したのです。

それでも巻名和歌には、歌一首とそれに関わる絵が付いていたので、まだ『源氏物語』との関わりはかるうじて残っていました。ところがこれが源氏香之図となると、もはや完全に記号化されたデザインですから、『源氏物語』を想像することすら難しくなります。例えば最初の帚木巻はタテ棒が五本引かれていただけです。これは五つの香が全部別々であり、一致するものがないという意味ですが、そのことと帚木巻との関わりは一

切認められません。もはや帚木巻の内容すら不要なのです。

もちろん香道などというものは、やはり平安時代には存在していませんでした。室町あたりから家元制度が確立しています。三条西実隆を祖とすることから、源氏香之図も実隆が考案したとされています。そこから香道とは別に、源氏香之図の模様が意匠として広がっていきました。それは工芸品・陶器・着物・帯にまで広がっています。

ダイジェスト本では巻名和歌に源氏香之図を取り入れ、さらに巻名を象徴する絵が付けられたことで、手軽にそして身近に『源氏物語』を身に付けることができるようになりました。一般庶民は『源氏物語』を読んでなくても、源氏香之図だけで源氏文化に触れたつもりになることができたのです。

それを京菓子もほっておきません。老松さんには「源氏香」という有名な干菓子があります。それを見たり食べたりすると、『源氏物語』の雰囲気を感じます。私がいいたいのは、それこそ江戸の源氏幻想であって、平安から鎌倉の人々は源氏香の図案を見たこともありません。ですからもし見せられても、『源氏物語』を想起することは絶対ありません。源氏香之図は、紫式部の関知しない後付けの記号だったので。

（講演録）平安の『源氏物語』と江戸の『源氏物語』

そのことについてさらに例をあげて説明します。源氏香之図には簡単な絵が付いていますが、桐壺や夕顔などの植物ならまだしも、空蟬や若紫になるとかなり飛躍したもので象徴されています。空蟬の場合、その漢字のイメージから、単純に木にまつている蟬が描かれていますが、肝心の空蟬巻に蟬は登場していません。もともと空蟬とはもぬけの殻のことであり、空蟬が衣装を脱ぎ捨てて逃げたという話です。空蟬は比喩的に歌に詠まれているだけですから、ここに蟬を描くのはおかしいのです。それにもかかわらず、空蟬から木にとまつている蟬が選び取られています。これも平安の人には理解できない、江戸の源氏幻想だといえます。

若紫巻の場合、普通なら紫草で象徴すべきですが、北山の春の場面の雀の子に妙に人気があつて、遂には雀が若紫巻の象徴になっていきます。巻名に雀は用いられていないし、第一雀は話題の中に「雀の子を犬君が逃がしつる」と登場しているだけで、具体的に登場しているわけではありません。雀を飼っていた部屋は別の部屋だったので、垣間見ている源氏の目に、雀は見えていないはずですが、それにもかかわらず、源氏香之図や巻名和歌あるいは「源氏かるた」まで、若紫巻を象徴・代表するもの

として雀が堂々と描かれています。

そうなることに、逃げた雀は紫の上の分身・象徴だという、取ってつけたような解釈まで出てきます。雀を重要な小道具に仕立てたいわけです。それはそれで否定できませんが、紫の上は逃げたのではなく源氏に拉致されたのですから、籠の鳥であることに変わりはありません。いずれにしても実態のない蝉や雀が、空蟬巻や若紫巻を代表するオブジェとなっているのです。これが江戸の源氏文化の特徴です。ひよつとすると源氏菓子も、ダイジュスト化の一環としてとらえられるのではないのでしょうか。

五

江戸の源氏文化は、いわゆる源氏絵にも大きな影響を及ぼしています。ご存じのように平安時代には国宝の源氏物語絵巻が描かれており、源氏と絵は不即不離の関係でした。江戸時代に至っても、土佐派や狩野派の絵師が源氏絵を大量に制作しています。面白いのはそこにほとんど本文が付いていないことです。もともと絵本というのは本文の読みやすさを考慮して付けられたものはずですが、源氏絵になると、絵が主体となります。

当初は五十四帖の有名な個所が絵にされ、それを集めた源氏画帖が主流でした。そこには本文が附随しておらず、絵を見るのが主体で、もはや本文を読むことは二の次にされているのです。

しかも以前は、絵は本文の読みを助けてくれると考えられていましたが、最近では逆に本文にはない絵師の創作・解釈も多分に含まれていることがわかってきました。こうなると絵を参考にして『源氏物語』を語ると、どんどん物語から遠ざかりかかない、誤読を生じかねないこととなります。

一例をあげると、江戸の源氏絵には室内に緑の畳が敷き詰められています。平安時代に部分的に畳が使用されてはいましたが、室内に敷き詰められることはありません。これは江戸の生活が源氏絵に書き込まれているといえます。ですから間違いないのです。

それ以上に注目したいのは、絵に本文にないことまで書き加えられていることです。先ほどの若紫巻は、有名な北山の垣間見場面として絵画化されています。小柴垣のところから垣間見る源氏の視線の先に、祖母尼君をはじめとして女性達が描かれています。場面はちょうど泣き顔の紫の上が別の部屋から尼君

のいるところにやってきて、「雀の子を犬君が逃がしつる」と訴えているところです。

当然そこに犬君はいないはずですが、ちゃんと犬君が書き込まれている絵もあります。また雀は伏籠から逃げた設定なっていますが、その伏籠は別の部屋にあるはずなのに、倒れた伏籠が画中に描かれています。本来犬君や伏籠は源氏の目に見えないはずなのに、読者へのサービスマナのか、尼君の前にさらされているわけです。

極めつけは雀です。逃げた雀ですから源氏の目に見えるはずはないのですが、江戸の源氏絵や版本の挿絵には、飛んでいる雀がはつきりと書かれています。少納言の乳母と思われる女性が外に向かって指さしていますが、その指の先に飛んでいる雀がいるのです。しかもそれが決して小さくない、むしろ大きな雀なのです（公募展に入賞した雀も大きかったですね）。そうになると、本文にある「雀の子」の意味までおかしくなります。第一これは飛べない雛ではなく、立派に飛べる雀だったことになるからです。

千年紀の折に源氏絵の展示があつたのですが、私は若紫巻の絵があると、雀が描かれているかどうかをチェックしました。

その結果、九割方雀が描かれていることを確認した次第です。伏籠や雀は、源氏に見えるもの見えるものではなく、絵を見ている読者に見せるために描かれているのですが、これでは絵への信頼性が薄くなります。いずれにしても絵に書かれることで、若紫巻の雀は象徴性を担わされたといえます。

江戸後期になるとさらに大問題が生じます。柳亭種彦の「偽紫田舎源氏」が出現したからです。貴族の世界を足利將軍にすりかえ、そしてさらには室町幕府から徳川家に置き換えられ、お家騒動や大奥のことが面白おかしく描かれることで、大流行しています。大衆はむしろ源氏よりも江戸城の大奥の生活に興味があつたのでしょう。さらに豊国による浮世絵が爆発的にヒットして、何千種類刊行されたかわからないほどです。これこそもう一つの庶民好みの『源氏物語』ですね。

それが浮世絵に描かれてヒットすると、その浮世絵はそのまま「源氏絵」という名を踏襲します。『源氏物語』が描かれていなくても、偽紫でも徳川源氏でも「源氏絵」として流通するわけです。そうなるとこれは勘違い源氏とか、本来の源氏から離れた「もう一つの源氏」のパロディが、むしろ量的に本当の源氏を圧倒・凌駕したことになります。それこそ典型的な

近世源氏の享受のありようといえます。

まとめ

弘道館が源氏のデザインを募集したのは、大変意義のあることだと思います。ただし『源氏物語』は、和歌百首の百人一首と違って大部なので、手軽に本文を確認することができません。原則、『源氏物語』を読んだことのない人も大勢挑戦するのだろうと思います。それもあつて弘道館では、定期的に『源氏物語』の講座を開いて啓蒙活動も続けていらつしやるようですね。それは大事な活動ですから、是非長く続けていただくことを願っています。

そういう場合、デザイン化された和菓子と元になっている『源氏物語』との間に距離という溝も生じてきます。それがダメだといいたいのではなく、そういった源氏文化の二重構造を知ってほしいのです。私はそれを「もう一つの『源氏物語』」

と称しています。それはあくまで源氏の本文に即さないで、ダイジェストあるいはマンガ、あるいは絵の知識によるイメージの『源氏物語』を、本文に即した『源氏物語』と分けて考えるべきだと思ふからです。この溝が埋らないまま、江戸以降現代まで源氏文化が続いているのです。それこそがタイトルに「平安の『源氏物語』と江戸の『源氏物語』」と付けさせていただけいた真意です。おわかりいただけでしょうか。ご清聴有難うございました。

・本稿は、弘道館にて開催された「京菓子「源氏物語」デザイン公募展二〇一八」に合わせて平成三十年十月二十七日に御苑内にある閑院宮で行われた近世京都学会主催の公開講座における講演会の原稿である。なお関連するものとして、吉海「紫式部と源氏文化——若紫巻の「雀」を読む——」〔紫式部〕と王朝文藝の表現史（森話社）平成24年2月がある。